

チェーンソーと鑿跡が、樟を素材とする体躯を覆う1体のユニコーン。自身の体長ほどの長さを持ち、螺旋状に虚空を貫こうとするその角は、この神話的存在の孤高さを感じさせながら、深い藍色の玉眼による瞳はどこか寂しげで、誰かの訪れを待ちわびているかのようだ。《我が唯一の望み》と題され、2023年に発表されたこの下山直紀の彫刻は、その作品名からも明らかなようにフランス国立クリュニー中世美術館に所蔵され、中世ヨーロッパ美術の最高傑作と称されるタピスリー《貴婦人と一角獣》の1枚を着想の源としている。1500年頃に製作され、赤い千花紋様が一際目を引くこの連作タピスリーでは、残りの5枚が触覚や聴覚といった五感をテーマとし、それらに織られたユニコーンの他にライオンや数々の動物が、貴婦人を中心に明確な構造を持って配されている。つまり、先行して発表されたユニコーンを含む本個展「霧のむこうの一角獣」の3点の彫刻は、すべてこのタピスリーの図像に属している。

多摩美術大学大学院美術研究科を修了後、木彫の技術の研鑽を日々重ね、動物彫刻を20年以上手掛けてきた下山だが、その表現には動物というモチーフの一貫性に対し、複層的な展開が認められる。2000年代の下山の初期活動を省みるならば、素材の多様性ととも動物たちは植物との「複合体」として造形化された。そこには、進化論に基づく生命への批評的洞察、さらには「擬態」への接近による認識論的な生成変化が、それら作品の特徴として読み取れるだろう。その後、動物単体をモチーフとする2010年代の「人獣」シリーズでは、メタフォリカルかつ擬人的な要素を備え、高村光雲をはじめとする日本の近代木彫表現との接続が意図されることで、彫刻の更新が志向されていた。

そのような長年にわたる実践により、醸成されてきた独自の彫刻観において、下山が手放すことのなかった木という素材と結びついた関係性は、極めて特殊なものといえる。生命への愛を、また自然への畏怖を表明する作家にとって、木は人間と自然の関係を巨視的に考察する上で、何より有効な媒体であり続けたはずだ。「人新世」と呼ばれる現代において、生態学的な視点に立つ下山が、人間が及ぼす環境への甚大な影響を時にアイロニーを交え、動物の表象に人間の姿を投影していったのはそのためだ。さらにそこには、人間と使役される動物／自然という二者の不均衡さへの自意識が、捻転するように織り込まれていく。かつて下山は、趣味である溪流釣りへの言及において、生を奪うことへの葛藤を表明していた。鋭利な刃物で木を彫り刻む行為こそ、河川に釣針の付いた糸を垂らすように自然を介入していく主客関係そのものを示している。

暗褐色の楯がチェーンソーで削られたボルゾイは、ロシアを原産とする犬種であり、今日の地政学的な視野を内在している。そして、それはまた狩猟犬であり、人間による動物への力の行使も強く意識させるものだ。この前方へ駆ける姿態をみせる《Atoma/Kenon》においては、表層の荒々しい痕跡こそが、中空へと拡散していく躍動を与えている。下山は、古代ギリシャの哲学者デモクリトスによる「原子(Atoma)」と「空虚(Kenon)」の概念を通じ、そこに分割不可能な個としての対象と、無限の運動を可能とする場の付与を思索している。その意味において、近年におけるボルゾイやユニコーン、双頭のライオン、さらには女性像の着衣に刻まれた多数の線的な痕跡は、詩人・哲学者ルクレティウスがかつて言及した、原子の斜行運動としての「クリナメン」に近接している。中沢新一はこのジグザグに進むクリナメンの運動を、カオスを引き裂く「亀裂」と捉え、そこに「物質的宇宙の生成」と「宇宙に産まれた最初の音楽」を見ていた。

ゆえに、点的な彫る行為のみならず、木の表層へ線的な刻む行為を重層化していくにあたり、下山が《貴婦人と一角獣》を選んだことは多分に示唆的だ。なぜなら、それは織物として、羊毛と絹による糸の無数の交錯そのものであるからだ。異次元に魅せられ、実在とイメージが混在した彫刻を追求する下山にとって、今も謎多きタピスリーから形なき形が与えられた3体は、それぞれが断片であり、かつ解きほぐされる仮象としてあろうとする。そして、「霧のむこう」という居場所に相応しく、束の間の現われとしてのそれら彫刻は、クリナメンの軌跡が生成する引き裂かれの拡がりやと遠さの中を彷徨っている。

参考文献

中沢新一『雪片曲線論』中央公論社、1988年

下山直紀「擬態 木造彫刻制作における生物内部進化論考察」『文様・デザイン・技術』2005』多摩美術大学文様研究室、2006年、pp.43-45

『フランス国立クリュニー中世美術館所蔵 貴婦人と一角獣展』NHK・NHKプロモーション、2013年